

上田市文化財調査報告書第133集

Ueda Castle Ruins (a national historical site)

史跡上田城跡

平成29～30年度 史跡上田城跡整備事業等に伴う発掘調査報告書

平成28～30年度 太郎山系石切丁場分布調査報告書

2019.3

上 田 市
上田市教育委員会

Ueda Castle Ruins (a national historical site)

史跡上田城跡

平成 29 ～ 30 年度 史跡上田城跡整備事業等に伴う発掘調査報告書

平成 28 ～ 30 年度 太郎山系石切丁場分布調査報告書

2 0 1 9. 3

上 田 市
上田市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県上田市二の丸に所在する国史跡上田城跡において平成 29 年度に実施した発掘調査の報告書である。なお、史跡外の二の丸広堀跡において平成 30 年度に実施した発掘調査の報告も併せて所収した。また、上田城の石切丁場の存在が推定される太郎山山系において、平成 28 年度から 30 年度にかけて実施した、丁場跡の分布調査の結果についても所収している。
- 2 調査は国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金（市内遺跡発掘調査等）を得て、上田市（上田市教育委員会事務局生涯学習・文化財課（平成 28 年度は文化振興課）文化財保護担当が直営で実施した。
- 3 調査は生涯学習・文化財課 和根崎剛、谷口弘毅が行い、現地調査、遺物整理、報告書刊行を含めて、平成 28 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 26 日まで行った。
- 4 本文の執筆及び総括は和根崎が行い、版組みは高橋和裕が行った。遺物の実測及び写真撮影は、高橋及び上原祐子、北村久仁子、久保田夕佳、石田奈緒が行った。なお、遺物の観察は和根崎が行った。
- 5 石切丁場分布調査に際し、森岡秀人氏（関西大学大学院講師）及び白沢勝彦氏（長野県立歴史館専門主事）、尾見智志氏（上田市立信濃国分寺資料館長）に調査指導及び現地調査同行等の配慮を賜った。
- 6 調査に係る基準点測量及び地形測量は（株）みずず総合コンサルタントに委託して行った。
- 7 調査に係る資料は信濃国分寺資料館収蔵庫に保管してある。なお、史跡上田城跡の出土遺物等には注記記号として、上田城跡を示す「UDJ (UeDaJyou)」を用い、続いて数字で実施年度と発掘地点を示す数字等を記してある。また、丁場跡での表採遺物等には「TIK (Tarousankei IshiKiricyouba)」を用いた。
(例) 上田城跡 平成 29 年度調査区 第 I 層 → UDJ-H29・I 層
太郎山系石切丁場 表山道十二丁の丁場跡 平成 29 年度表採 → TIK12-H29・ヒョウサイ
- 8 本書の編集刊行は事務局（上田市教育委員会 生涯学習・文化財課）が行った。なお、調査結果は「報道発表資料」等で一部紹介しているが、内容に相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 10 本書が刊行されるまでには、多くの方々や諸機関の御理解と御協力を賜った。以下、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
文化庁文化財部文化財第二課、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、
長野県近世城郭・城下町研究会、上田市文化財保護審議委員会、
史跡上田城跡整備実施計画検討委員会、眞田神社、砥石伊の会、砥石米山城跡保存会、
太郎山山系を楽しくつくる会、河西克造、倉澤正幸、高田 徹、横沢 瑛

目 次

例 言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査の経過	4
第2章 調査の目的と方法	5
第1節 調査の目的	5
第2節 調査の方法	6
第3章 発掘調査の結果	7
第1節 本丸下の段の調査（平成29年度）	7
1. 調査対象とした遺構	7
2. 基本土層	7
3. 遺構と遺物	7
(1) 近世の遺構と遺物	7
(2) 近代の遺構と遺物	8
第2節 二の丸広堀の調査（平成30年度）	8
1. 調査対象とした遺構	8
2. 基本土層	8
3. 遺構と遺物	9
(1) 近世の遺構と遺物	9
(2) 近現代の遺構と遺物	9
第4章 太郎山系石切丁場の結果	10
第1節 虚空蔵堂丁場跡	10
1. 位置と環境	10
2. 矢穴の形状等	10
3. 遺跡としての評価	11
第2節 牛伏城南西丁場跡	11
1. 位置と環境	11
2. 矢穴の形状等	12
3. 遺跡としての評価	12
第3節 天狗石丁場跡（A地点・B地点）	12
1. 位置と環境	12
2. 矢穴の形状等	12
3. 遺跡としての評価	13
第4節 指差しゴーロ（転石採取推定地）	13
1. 位置と環境	13

第5節 表山道十二丁の丁場跡	13
1. 位置と環境	13
2. 矢穴の形状等	14
3. 遺跡としての評価	14
第6節 四十八曲峠六丁の丁場跡	14
1. 位置と環境	14
2. 矢穴の形状等	14
3. 遺跡としての評価	15
第7節 ぼこの首丁場跡	15
1. 位置と環境	15
2. 矢穴の形状等	15
3. 遺跡としての評価	15
第8節 上塩尻大沢丁場跡	15
1. 位置と環境	15
2. 矢穴の形状等	15
3. 遺跡としての評価	15
第5章 調査の成果と課題	16
報告書抄録	61
参考・引用文献	62

表 目 次

第1表 遺物観察表(土器・陶磁器等)	18
--------------------------	----

図 版 目 次

調査区図版 第16・17図	19
第18・19図	20
第20～22図	21
遺物図版 平成29年本丸土塁跡調査区 第23図～第51図	22～50
平成30年二の丸広堀調査区 第52図	51
太郎山系石切丁場調査区 第53図	52
現場写真図版 写真1～8	53
写真9～13	54
写真14～21	55
写真22～26	56
第54図 太郎山系石切丁場における丁場跡の分布状況	57・58
第55図 表参道十二丁の丁場跡 平面図及び断面図	59・60

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

上田市及び上田市教育委員会では、史跡上田城跡の保存と整備を図るため、文化庁及び長野県教育委員会の指導、助言のもと、城郭の保存整備に精通する研究者、地元の学識研究者、関係職員からなる「上田城跡公園整備計画研究委員会」を昭和63年度に設置して2年間に及ぶ検討を重ね、その答申に基づき、平成3年3月に『史跡上田城跡整備基本計画（以下、整備基本計画）』を策定した。

整備基本計画では、上田城跡の整備を短期、中期、長期の3段階に分けて段階的に実施していくこととし、城跡にふさわしくない施設の場外移転、計画的な発掘調査の実施、調査結果と正確な史資料に基づく遺構の復元整備、城構えをふまえた史跡範囲の拡大等を基本的な目標として掲げている。

計画に掲げた短期目標としては、本丸及び二の丸の各虎口と本丸郭内の整備に重点をおき、早期に城郭としての概要を復元・整備していくことを挙げ、上田市教育委員会では平成2年度から上田城跡の発掘調査に着手し、調査結果と絵図等の史資料に基づいて二の丸北虎口の石垣復元、電線の地中埋設、本丸堀の浚せつ、本丸内店舗兼住宅の移転、本丸西虎口の遺構地上表示、本丸東虎口櫓門の復元などの整備事業を実施してきた。

平成14年度からは中期整備目標に掲げた本丸南側の尼ヶ淵に所在する南櫓下石垣の解体修復工事に着手し、平成19年度に完成した。工事に際し、平成15年度には城郭整備の専門的研究者に委員をお願いして「史跡上田城跡整備検討委員会」を設置し、施工方法等について指導、助言をいただいた。

この頃、整備基本計画に中期整備目標として掲げていた市民会館の史跡外移転が具体化し、二の丸東虎口の南側一帯の武者溜りの復元整備について本格的に検討する必要性が生じたこと、また、長期整備目標としていた本丸隅櫓や土塀等の建造物復元にに向けた取り組みをいっそう推進するために、平成21年度に「史跡上田城跡整備実施計画検討委員会」を組織し、翌年度に整備基本計画の改訂に着手し、当初計画の内容と計画の設定時期を見直した。一方、整備基本計画の策定時から必要性が指摘されていた「史跡上田城跡保存管理計画（以下、保存管理計画）」についても策定の作業に着手し、平成23年度に整備基本計画の改訂及び保存管理計画の策定が完了し、上田城跡の整備は改めてスタートを切った。

発掘調査については、平成24年度から28年度まで、二の丸東虎口で調査を行った武者溜り付近の復元整備に向けた調査と、平成28年に放送されたNHK大河ドラマ「真田丸」に伴う観光客増加を見込んだ、上田城跡観光北駐車場等の整備に伴う調査が実施された。今回報告する発掘調査は、これに続くものであり、上田城跡の史跡整備に伴うもので、範囲が史跡の内外に及ぶことから、県教委との協議の結果、国庫補助金は史跡整備を目的とした補助事業ではなく、埋蔵文化財緊急発掘調査（市内遺跡発掘調査等）補助金の交付を得て実施することとなった。

また、近年、城郭の石切丁場が注目され、研究が進んでいることから、以前から上田城の石切丁場であると考えられてきた太郎山山系について、分布調査を実施して現状を確認するとともに、将来実施する計画である、個々の丁場跡の時期決定及び範囲確認を目的とした調査に向けたデータの収集に努めた。調査は平成28年度から30年度まで行い、こちらも埋蔵文化財緊急発掘調査（市内遺跡発掘調査等）補助金の交付を得て実施した。

第2節 調査の体制

事務局（上田市教育委員会 文化振興課（H28年度）／生涯学習・文化財課（H29年度～））

平成28年度 教育長

小林一雄

平成 29 年度	教育次長	中村栄孝
	文化振興課長	浅野之宏
	課長補佐兼文化財保護担当係長	塩崎幸夫
	文化財保護担当係長	和根崎剛 (担当)
	文化財保護担当	中沢徳士・滝沢敬一・松崎訓央
	教育長	小林一雄
	教育次長	中村栄孝
	生涯学習・文化財課長	小林 薫
	課長補佐兼文化財保護担当係長	塩崎幸夫
	課長補佐兼文化財保護担当係長	和根崎剛 (担当)
平成 30 年度	文化財保護担当	中沢徳士・滝沢敬一・谷口弘毅
	教育長	小林一雄 (平成 30 年 4 月 28 日まで) 峯村秀則 (平成 30 年 4 月 29 日から)
	教育次長	中村栄孝
	生涯学習・文化財課長	小林 薫
	課長補佐兼文化財保護担当係長	塩崎幸夫
	課長補佐兼文化財保護担当係長	和根崎剛 (担当)
	文化財保護担当	中沢徳士・滝沢敬一・谷口弘毅 (副担当)

調査組織 (発掘調査・整理作業・報告書刊行)

担 当 者: 和根崎剛・谷口弘毅

発掘及び測量作業: 足立芳紀、新井邦雄、内田守之、川上京子、川上恒夫、久保田隆、久保田夕佳、関 大子、高橋和裕、竹内和好、田中八枝子、塚原吉政、中村眞理子、宮澤秀昭、村松秋恵、柳沢敬三、若林政一

整理作業及び報告書作成: 上原祐子、北村久仁子、久保田夕佳、高橋和裕、石田奈緒

調査指導 上田市文化財保護審議委員会、史跡上田城跡整備実施計画検討委員会

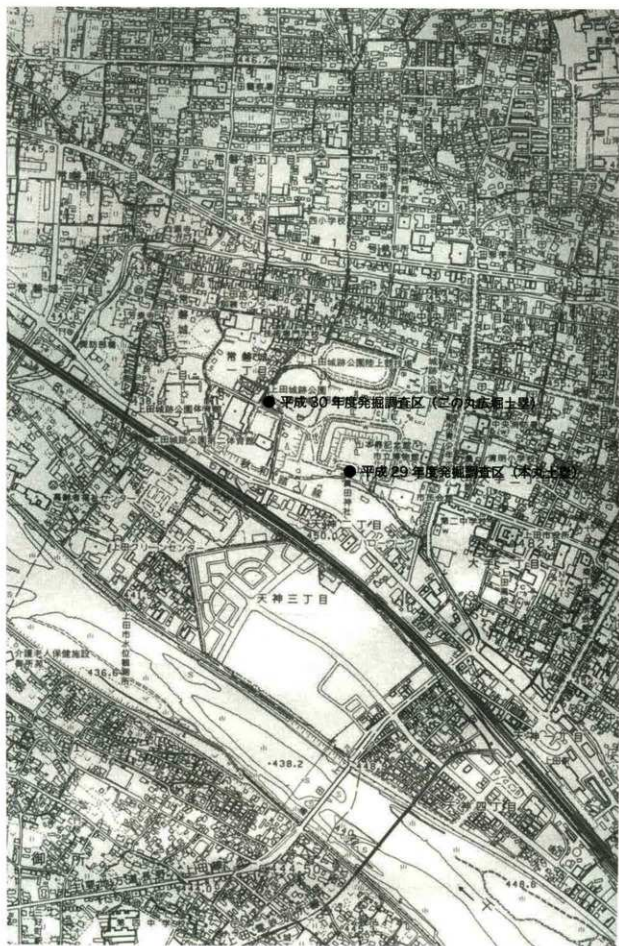
上田市文化財保護審議委員会名簿

(平成 27 年 4 月 1 日～29 年 3 月 31 日)

	氏 名	所 属 等	分野
会 長	川 上 元	元上田市誌編さん室長	考古
会長代理	宮本 達郎	元上田市誌編さん委員	郷土史
委 員	小倉絵里子	高崎市タワー美術館学芸員	美術史
委 員	倉石あつ子	跡見学園女子大学文学部教授	民俗
委 員	町田龍一郎	筑波大学生命環境科学研究科教授	生物
委 員	水沢 教子	長野県埋蔵文化財センター調査研究員	考古・文化財保存
委 員	土本 俊和	信州大学工学部教授	建築史

(平成 29 年 4 月 1 日～31 年 3 月 31 日)

	氏 名	所 属 等	分野
会 長	川 上 元	元上田市誌編さん室長	考古
会長代理	宮本 達郎	(故人)	郷土史
委 員	小倉絵里子	高崎市タワー美術館学芸員	美術史
委 員	太田喜美子	駒澤大学博物館学講座講師	民俗・石造文化財



第1図 史跡上田城跡とその周辺 (S=1/5,000)

委員	町田龍一郎	筑波大学生命環境科学研究科教授	生物
委員	水沢 教子	長野県埋蔵文化財センター調査研究員	考古・文化財保存
委員	土本 俊和	信州大学工学部教授	建築史

史跡上田城跡整備実施計画検討委員会名簿

(第Ⅱ期 平成 25 年 10 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日)

	氏 名	所 属	分 野
委員長	渡邊 定夫	東京大学名誉教授	都市計画
副委員長	川上 元	上田市文化財保護審議委員会会長	地元研究者
委員	吉田 博宣	京都大学名誉教授	造園
委員	平井 聖	前昭和女子大学学長・東京工業大学名誉教授	建築史（伝統工法）
委員	宮本長二郎	（独）文化財研究所名誉研究員	建築史（考古建築史）
委員	五味 盛重	（財）文化財建造物保存技術協会参与	建築史（石垣構造）
委員	千田 嘉博	奈良大学文学部文化財学科教授	城郭考古
委員	浅倉 有子	上越教育大学大学院学校教育研究科教授	近世史・古文書
委員	三浦 正幸	広島大学名誉教授	建築史（伝統工法）
委員	西 和夫	（故人）	建築史（伝統工法）
委員	三井 圭嗣	東京都写真美術館学芸員	初期写真
委員	栗村 道子	公葬	市民代表

第 3 節 調査の経過

(1) 上田城跡発掘調査

平成 29 年度 本丸土塁南辺部 真田神社境内Ⅱ（調査面積約 30 ㎡）【史跡内】

現場発掘調査 平成 30 年 2 月 23 日～3 月 2 日

〈出土遺構・遺物〉近世の遺構は検出されなかったが、攪乱層から真田氏時代の瓦、近世、近代の瓦がまとまって出土した。

平成 30 年度 小泉曲輪 広堀との境界の土塁（調査面積約 70 ㎡）【史跡外】

現場発掘調査 平成 30 年 12 月 10 日～12 月 11 日

〈出土遺構・遺物〉二の丸堀に面した土塁の一部を確認した

(2) 太郎山石切丁場分布調査

平成 28 年度 太郎山及び虚空蔵山南斜面

虚空蔵堂丁場跡・牛伏城南西丁場跡・表山道十二丁の丁場跡・
天狗石丁場跡・飯綱山城周辺の露頭

平成 29 年度 太郎山南斜面

虚空蔵堂丁場跡・牛伏城南西丁場跡・表山道十二丁の丁場跡・
指差しゴーロ丁場跡・眉間林一帯（指差しゴーロの転石採取推定地）

平成 30 年度 太郎山及び虚空蔵山、東太郎山南斜面、東太郎山東斜面

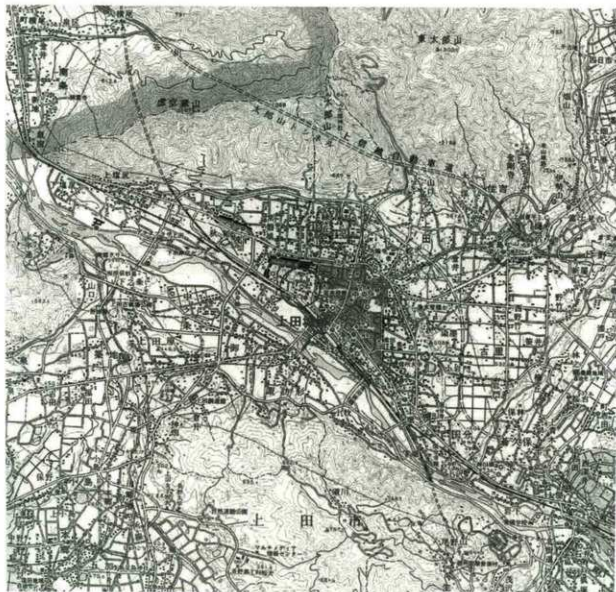
虚空蔵堂丁場跡・牛伏城南西丁場跡・表山道十二丁の丁場跡・
四十八曲峠六丁の丁場跡・ぼこの首丁場跡、上塩尻大沢丁場跡・
飯綱山城周辺の露頭・東太郎山の露頭（金剛寺、伊勢山、畑山）

第2章 調査の目的と方法

第1節 調査の目的

本書で報告する発掘調査は、国史跡及び史跡外の埋蔵文化財包蔵地において平成29年度から30年度に実施した2地点である(第4図)。平成29年度に実施した本丸下の段の調査結果については、遺構と一部の出土品について既刊の発掘調査報告書(『史跡上田城跡 上田市教育委員会2018』)で報告しているが、出土品の整理作業を終えたため、新たな知見を加え、本報告書に収録した。また、平成30年度に実施した上田城跡野球場のブロック塀の撤去等に係り、開発に伴う事前調査として史跡外の広堀土塁跡で行った発掘調査についても収録した。

本丸下の段の調査は、現存する土塁状の盛土が近世の普請によるものかどうかを確認するとともに、既に失われてしまった土塁の版築等を検出することで、土塁の位置と規模の確認を目的とした。近代以降の擾乱が著しく、遺構の保存状態は決して好ましい状況ではなかったが、後述するような成果を得た。今後、尼ヶ淵に面した本丸土塁及び土堀の復元整備が計画されているが、その際のデータとして有効な成果を得ることが出来たと考えている。



第2図 上田城跡とその周辺地形図 (S=約5万分の1)

一方、上田城跡野球場内で実施した発掘調査は、土塁状の盛土が近世の普請によるものかどうかを確認するとともに、既に失われてしまった土塁の版築等を検出することで、土塁の位置と規模の確認、そしてブロック塀の基礎による破壊の規模を確認することを目的とした。その結果、近世の土塁の版築を検出し、その遺存状況を確認するとともに、ブロック塀解体工事及びネットフェンス設置工事の施工に伴い、新たな遺構の破壊がないように処置した。

また、太郎山山系には以前から上田城の石切丁場跡だと伝えられる場所が複数伝えられ、山麓にも関連する地名があることが指摘されていたが、詳細な現地確認や分布調査等は行われていなかった。そのため、露頭や地形の観察がしやすい初冬と積雪が無くなった時期を見計らって、丁場跡の分布調査を実施し、その現状把握に努めた。調査には、従前から太郎山山系の山城の整備等に尽力されている「太郎山山系を楽しくつくる会」の皆さんに、現場への道案内や事前情報の収集等で協力を賜った。その結果、今まで具体的に把握されていなかった丁場跡の現状が明らかになり、時代決定等には今後の更なる検討を要するものの、矢穴の大きさ等から寛永年間の丁場跡と推定される場所が確認されるなど、今後、上田城との関連を検討すべき丁場跡を確認することができた。

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 埋蔵文化財包蔵地の名称と記号

国史跡上田城跡の指定範囲は本丸と二の丸（一部を除く）であるが、上田市文化財分布図（上田市教育委員会 1996）には、三の丸とその周辺も含めて埋蔵文化財包蔵地「上田城跡」という名称で記載されている。なお、石切丁場跡については埋蔵文化財包蔵地としての記載されていないため、文化財保護法第97条に基づき、遺跡発見の通知を長野県教委委員会に提出した（30生涯第694号）。

調査にあたり、記録の便宜を図るために、アルファベット等を用いて次のように遺跡記号を設定した。平成2年度以降の発掘調査の際に使用してきたUDJ（上田城（UeDaJou）跡）を用い、調査年度を明らかにするために元号（平成）と年度をH24のように簡略化して表し、両者を組み合わせて「UDJ-H24」とし、遺物の注記などにこの記号を用いた。また、石切丁場跡での表探遺物等にはTIK（太郎山系石切丁場（Tarousankei IshiKiricyouba）跡）を用いた。

発掘調査は地下の状況と遺構の有無、地山層（上田泥流層）までの深さ、出土遺物の有無を確認するために、調査区を設定してトレンチ法を主体に行った。トレンチは原則として幅0.5～1.0m、長さは任意に設定して掘削したが、必要に応じてさらに幅を広げた。表土剥ぎは発掘現場の状況に応じてバックホー（0.1級、0.2級）を用いた。遺構の検出作業は人力で検出面の精査を行い、必要に応じてサブトレンチやテストピットを設定して行った。遺構の名称は記録等の便を図るため記号を用い、遺構番号は時代等に関係なく種類ごと、検出順に付した。遺物は層位別に取り上げた。埋め戻しは砂で遺構を被覆したうえで、掘削土を用いて行った。

石切丁場跡での調査は、露頭や転石に矢穴や矢穴痕が見られるかどうかを、落ち葉や草などを取り除きながら確認した。調査チームは概ね10名程度として山中に入り、露頭周辺を一行になって調査し、見落としが無いように努めた。なお、丁場跡の命名については、従前から呼ばれていた呼称がある場合にはそれに従い、特に名称がなかった場所には、付近の地名や目印になるものを冠して命名した。今回の調査はあくまでも分布調査であるため、丁場跡での掘削を伴う発掘調査は実施していない。

第3章 発掘調査の結果

第1節 本丸下の段の調査（平成29年度）

（本節については、「史跡上田城跡」（上田市教育委員会 2018）で既に報告しているが、遺物の整理作業が完了したため、遺物について一部加筆して再収録した。）

1. 調査対象とした遺構

国史跡上田城跡における史跡面は、寛永3（1626）年に仙石忠政（1578～1628）が着手した上田城の復興工事から、廃藩置県により藩主松平忠礼（1850～1895）が上田県知事となり、明治4年（1871）に廃城令が施行されるまでの間（245年間）の地表面とする。厳密に言えば地表面には僅かな土砂の堆積もあろうが、洪水や火災等により、広範囲に大きく土を被ったり盛土をした経過はなかったと考えられるためである。現在見ることができる上田城の縄張が形成、維持され、公的に「城」としての機能を失った廃城令をもって「近世の上田城」の終焉とし、この間の遺構を調査対象とした。

なお、上田城跡には明治4年に陸軍東京鎮台第二分営が置かれ、軍の撤退後は神社境内や公園等としての利用がされてきた。近年、こうした近現代の城跡の変遷過程を歴史的に評価し、史跡の本質的価値ではないものの、可能な限り保存活用していくべきだという考え方も支持されるようになってきている。発掘調査では、こうした近現代に設置された構造物の遺構も検出されるため、陸軍の管理下に置かれた時点をもって、「近現代の上田城跡」の取り扱いをし、遺構についても可能な範囲で調査・保存することとした。

上記により、仙石期以降で最も古い正保4（1647）年「信州上田城絵図」を基準とし、それ以降に作成された城絵図等も参考にすると、本調査区内でその存在を推定することができる近世遺構は、尼ヶ淵崖面上の土塁跡である。ただし、事前の現状観察の際には、土塁は表面を削られるなどして原形を留めておらず、一部が残るのみと判断した。

今回の調査は、真田神社の旧社務所跡地において実施した。

2. 基本土層（第3図）

真田神社の前身となる松平神社が本丸下の段に鎮座したのは明治12年（1879）のことである。基本土層とした土層は近代以降に土塁が破壊され、埋立により平坦地となったと考えられる。地表下110 cmから地山となる上田泥流層を検出するが、今回の発掘調査区はそれと異なる。表土層（Ⅰ層）が30 cm前後あり、その下に黒褐色の埋立土（Ⅱ層）が80 cm程度の厚さで存在する。崖寄りではその下に土塁の版築（Ⅲ層）が残っている場合があるが、僅かであり、この下に地山として（Ⅳ層・上田泥流層）が存在する。

金箔瓦や近世～近代の大量の瓦を含む土層は、分層は叶わず、一度に大量の土砂により埋め立てられたものであると判断した。

3. 遺構と遺物

（1）近世の遺構と遺物

ア. 遺構（第16図）

土塁と推定される盛土をトレンチを設定して半裁し、版築の状況等を確認したが、土塁は完全な形では残存しておらず、近代以降、一部が破壊され、新たに土砂が盛られている状況が確認できた。盛土として利用された土砂からは近世、近代の瓦が出土している。

一方、社務所跡地は一部に土塁の版築と考えられる叩き締めた土層（Ⅲ層）が確認されたが、便漕や



第3図 基本土層

水道管の埋設に伴う攪乱があり、地下の状況は良好ではなかった。ただ、境内を平坦にするための埋土(Ⅱ層)から近世及び近代の瓦が多量に出土している。

イ、遺物 (第 23～51 図)

調査区内から近世の瓦が多数出土しており、遺構に伴うものではないが、注意したい。仙石期あるいは松平期のものと推定されるが、これを編年的に細分することは叶わなかった。ただし、仙石氏の頃に使用された「永楽通寶紋」のある軒丸瓦の破片が 1 点出土している (第 43 図 4)。また、真田氏時代のものと推定される金箔瓦 (鬼瓦) の破片と同時期のものと推定される鬼瓦と考えられる破片が 1 点出土している (第 46 図)。これと、後述するように近代の瓦の混入が認められることから、埋立土の調査に当たり、真田氏、仙石氏の時代から近代までの瓦片が、一様に混入することを可能とした場所から土砂を調査したことが窺える。

(2) 近代の遺構と遺物

ア、遺構

本調査区には平成 26 年まで社務所 (大正末期に建築されたと見られる) が存在していた。解体前の観察で、建物は土塁を破壊して建築されていることが明らかであった。建物解体時に立会った際には、基礎は四角柱状の石材を長方形に並べた中に土塁由来と推定される粘土状の土砂を 30～40 cm ほどの厚さで充填して造られており、この上に木造の構造物が存在していた。この際に建物が地面を掘削して造られたものでないことを確認している。これらが全て撤去された時点での立会いでは、この建物に関する他の遺構は、便所と水道管の他は確認していない。また、その他の近代の施設等の遺構も確認していない。

イ、遺物 (第 23～51 図)

遺構に伴う遺物は出土していない。ただし、明治～大正期に属する瓦片と陶磁器片が埋立土内から出土している。版築の残存部分の直上からも、こうした瓦が出土しているため、土塁を破壊して埋立土で覆うという普請は一連のものである可能性がある。

第 2 節 二の丸広堀の調査 (平成 30 年度)

1. 調査対象とした遺構

第 1 節と同様に仙石期以降で最も古い正保 4 (1647) 年「信州上田城絵図」を基準とし、それ以降に作成された城絵図等も参考にとすると、本調査区内で、その存在を推定することができる近世遺構は二の丸広堀の土塁跡である。

発掘調査では、土塁と直交する 8 本のトレンチを設定し、バックホーで表土を取り除き、版築の部分が残存している場合には、作業員により版築面の精査を行った。また、撤去するブロック塀により土塁がどの程度まで破壊されているかを確認し、新たに設置するネットフェンスにより遺構の新たな破壊が生じないように、現状把握に努めた。

2. 基本土層

二の丸広堀跡では平成 29 年度にトイレの新築の際に試掘調査を実施したところ、近世の土塁の一部のように見えた土は、近代以降の盛土と判明している。今回の調査範囲においても、基本土層はほぼ同じであるが、土塁の版築が遺存している部分があったため、遺構面の把握が出来たことは小泉曲輪周辺の基本土層を捉えるうえで、有益なデータとなった。

版築の上に新たに盛土された土砂も含め、トレンチの壁面に現れた土層断面を第 17 図に示した。表土層 (Ⅰ層) が 5～10 cm あり、その下に近現代の陶磁器やガラス製品を含む土層 (Ⅱ層) が存在する。さらにその下に土塁の版築と考えられる粘土を叩き締めた黄褐色土 (Ⅲ層) が存在するが、後世に表面を大きく削られているようで、土坑状の落ち込みがあった。地山は上田泥流層 (Ⅳ層) である。

3. 遺構と遺物

(1) 近世の遺構と遺物

ア. 遺構

現状では、絵図に記される土塁があった位置には、土塁あるいは同様の盛土があり、その上にブロック塀が存在している。まず、近世の土塁跡かどうかの確認をするために、これを断ち割るトレンチを6本設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、版築と考えられる土層が広い範囲で遺存していることが確認できた。版築と考えられる土層は固く叩き占められており、こうした版築特有の良質の粘土質の土を使用していた。削平等により絵図に見られる本来の土塁の規模は失っているものの、遺構の一部が保存されていることが明らかになった。

イ. 遺物

明らかに土塁に伴うと判断される遺物は皆無である。ただし、土師質の土器片が版築の直上から出土している（第52図1）。土塁の普請中に混入した土器片である可能性もあろうか。

(2) 近現代の遺構と遺物

ア. 遺構

前項のとおり、本調査区は現在も稼働中の上田城跡野球場の一角であり、昭和3年（1928）に設置された当時の構造物が地下に残っている可能性も認められた。掘り下げの結果、陶磁器等を投棄した穴が見つかったが、出土品から太平洋戦争以後のものと判断した。

イ. 遺物

近現代の陶磁器の破片が多数出土している。



第4図 発掘調査区とトレンチ配置図

第4章 太郎山系石切丁場分布調査の結果

寛永3年(1626)に着手された仙石忠政による上田城復興工事以降、近世を通じて石垣石材として多用された緑色凝灰岩(これを文紋岩とする見解もあるが、本報告では緑色凝灰岩としておく)の調達の間として考えられるのは、上田城から北に直線距離で2kmほど離れた場所にある太郎山系である。太郎山、東太郎山、虚空蔵山などかななる東西に連なる山々で、その南側斜面には、以前から上田城の石切丁場跡とされる露頭や「ゴロ」と呼ばれる崩落した岩によって形成されたガレ場が複数知られているものの、伝承等に基づく程度で、具体的な現地確認等がされていない場所がほとんどであった。今回、平成28年度から3年間をかけて、事前に文献や聞き取りによって得た情報をもとに現地踏査を行い、丁場跡の分布状況と個々の丁場跡の範囲を確認した。今回の調査で確認した丁場跡は7エリアである。ただし、現状ではこれらの丁場跡の全てを「上田城の石切丁場」と断定することは出来ない。それは今回の調査があくまで分布調査及び範囲確認調査であり、個々の丁場跡が稼動した時期の判定等は実施していないからである。確認した丁場跡の中には、近現代のドリルによる採掘痕がある場合があり、現状の露頭に矢穴あるいは矢穴痕が存在しない場合でも、近世に丁場跡とされていた可能性は否めない。丁場が稼動した時代等についての検証作業については、今後、発掘調査を実施し、露頭の周囲に散在する「ブリ」とも呼ばれる採掘時の屑石に近世の矢穴痕が見られるか、丁場跡の周囲に陶磁器等の近世の遺物が残されていないか等について調査し、判断すべきだと考えている。

今回の調査で確認された丁場跡は次に述べる7箇所である(第54図)。なお、上田城跡に関連した丁場とは断定できないものの、近世の遺跡として重要なものであると判断した5箇所の丁場跡(虚空蔵堂丁場跡・牛伏城南西丁場跡・表山道十二丁の丁場跡・四十八曲峠六丁の丁場跡・ぼこの首丁場跡)について、文化財保護法第97条による遺跡発見の通知(30生涯第694号)を長野県教育委員会に提出し、埋蔵文化財分布地図に登録した。

第1節 虚空蔵堂丁場跡

1. 位置と環境(第7図)

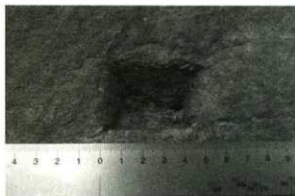
太郎山の南斜面の標高510m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭に矢穴列と矢穴列痕が見られる。露頭前方(南側)の平場には虚空蔵堂が建立され、以前から丁場跡として知られていた。「御城普請二付伺相済候覚」(『師岡文庫』25 市立上田図書館)には、享保18年に「虚空蔵の谷から眉間林」から石を搬出したという記述があり、関連がうかがえる。堂の境内であるためか転石や屑石は目立たない。

2. 矢穴の形状等

露頭には矢穴列を3本と3箇所の矢穴列痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるも



第5図 太郎山系の山々



第6図 虚空蔵堂丁場跡 矢穴

ので、比較的遺存状態の良い矢穴列1本において簡易な計測をしたところ、矢口は長さ5cm、深さ5cm、幅3cm、矢穴間隔は6～7cmを測った。確認できた矢穴痕の形状も、幅を除いてほぼ同様の数値を計測した。森岡秀人氏・藤川祐作氏の矢穴の型式分類（森岡・藤川2008）によれば、Cタイプに属するものと判断され、現地で森岡氏が実見された際の見解も同様であった。

また、ドリルによる採石の痕を確認した。近現代まで丁場が稼動したことを示す痕跡であろう。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼動期間は、江戸時代中期～末、近現代と考えられる。

第2節 牛伏城南西丁場跡

1. 位置と環境（第7図）

太郎山の南斜面の標高約680m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭に矢穴列痕が見られる。虚空蔵堂丁場跡から登山道を15分程度登った場所であり、丁場からさらに10分程度で牛伏城の主郭に連する。前出の「御城普請ニ付何相済候覺」には、享保18年に「虚空蔵の谷から眉間林」から石を搬出したという記述があり、虚空蔵堂丁場跡とともに関連がうかがえる。

今回の分布調査で確認した丁場の中で一番大規模なものであり、一帯には次の遺構が存在している。なお、遺構の表現については、金沢城の戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱから引用させていただいた（石川県金沢城調査事務所2013）。

- ① 土中の原石を掘り起こしたためにできた窪地（石材採掘土坑、採掘坑、採石坑）
- ② 窪地から掻き出された土砂の堆積（排土山）
- ⑥ 排土山の裾付近に散在する石垣材として不適当な大きさの屑石群
- ⑦ 採掘坑から少し離れて造成された平場



第7図 丁場跡等の分布状況（その1・虚空蔵沢一帯） S=1/10,000

⑧ 自然の転石露頭

※数字は先述の引用した報告書に依拠している。

規模の大きな丁場であるが、矢穴あるいは矢穴痕はごくわずしか確認していない。クレーター状の①を馬蹄形に取り囲むように②が存在する。⑥は屑石が②の頂部にまで堆積し、②の表面を見ることができないほどであるが、屑石に矢穴痕が残るものは確認していない。①は②とセットで2基確認できる。

2. 矢穴の形状等

露頭には2箇所の矢穴列痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるもので、矢口は長さ5cm、深さ5cm、幅2cm、矢穴間隔は6～7cmを測った。Cタイプに属するものと判断され、現地で森岡氏が実見された際の見解も同様であった。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼働期間は、江戸時代中期～末と考えられる。

第3節 天狗石丁場跡 (A地点・B地点)

1. 位置と環境 (第7図)

太郎山の南斜面の標高650m付近にある丁場で、指差しゴーロの谷に面した六方石(天狗石)の露頭2箇所で見穴とドリルの採掘痕が見られる。山麓にはこの露頭のいずれかから採掘したと伝えられる石灯籠の部材や、道祖神があり、以前から丁場跡と認識されていた場所である。上田城の本丸西虎口石垣の解体修復工事の際に、石材に六方石が含まれていたことを確認している。前出の「御城普請二付何相済候覧」の記述にも注意したい。

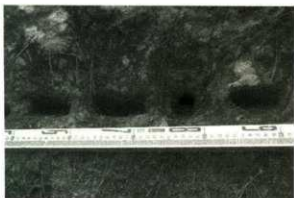
今回の分布調査で確認した遺構は次のとおりである。

- ① 土中の原石を掘り起こしたためにできた窪地(石材採掘土坑、採掘坑、採石坑)
- ② 窪地から抜き出された土砂の堆積(排土山)
- ⑤ 掘り出された状態の原石
- ⑥ 排土山の裾付近に散在する石垣材として不適当な大きさの屑石群
- ⑦ 採掘坑から少し離れて造成された平場
- ⑧ 自然の転石露頭

※数字は先述の引用した報告書に依拠している。

2. 矢穴の形状等

露頭に1箇所の矢穴と矢穴痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるもので、矢口は長さ5cm、深さ5cm、幅3cmを測った。Cタイプに属するものと判断された。六方石は柱状節理により形成された木口が六角形を呈する自然石である。矢穴を節理に沿って穿てば、石材を採掘すること自体はそれほど難しくはなさそうであり、矢穴がほとんど残されていないのはそのためであろうか。ただ、



第8図 表山道十二丁の丁場跡矢穴列B 矢穴



第9図 表山道十二丁の丁場跡矢穴列D 矢穴

長い石材を切断した際の矢穴痕が、虎口部分に残されていた。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼働期間は、江戸時代中期～末、近現代と考えられる。

第4節 指差しゴーロ（転石採取推定地）

1. 位置と環境（第7図）

太郎山の南斜面にあるゴーロ（ガレ場）で、遠方から見るとガレ場がひとさし指を伸ばした掌のように見えることからこの名がある。ゴーロは尾根付近の緑色凝灰岩の露頭から崩れ落ちた岩塊が長い年月の間に谷を埋め、谷の末端部まで大小様々な岩塊がごろごろしている。末端部にはやや小ぶりであるが石垣石材として利用できそうな大きさの転石が見られる。

ゴーロは「眉間林」の地名が残る場所の南側にあり、前出の「御城普請二付何相済候覚」は、享保18年に「虚空蔵の谷から眉間林」から石を搬出したことを伝えており、これは松平忠愛による尼ヶ淵石垣築造の際のことである。今回の虚空蔵谷から眉間林一帯での分布調査では、丁場跡もいくつか確認されており、この付近が石材調達場として利用された可能性があろう。

第5節 表山道十二丁の丁場跡

1. 位置と環境（第10図）

太郎山の南斜面の標高810m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭に多数の矢穴列及び穴列痕が残っている。表山道登山道に面し、明治年間に太郎山神社の鳥居の部材を採掘したという里伝があり、また、



第10図 丁場跡等の分布状況（その2・和合沢一帯） S=1/10,000

登山道から容易に近づける場所にある矢穴列が、登山者の間では以前から知られていた場所でもあった。登山口から30分程登った場所であり、丁場からさらに5分程度で先述した鳥居に達する（この鳥居がある一帯は平場や段郭、堅堀が観察でき、未周知の山城跡である可能性がある。そのため、今後、さらに現地調査を行って縄張り図を作成し、新発見の遺跡として埋蔵文化財分布地図に登録したい）。ただし、文献等でこの丁場が記載された史料は未確認である。

今回の分布調査で確認した遺構は次のとおりである。

- ① 土中の原石を掘り起こしたためにできた窪地（石材採掘土坑、採掘坑、採石坑）
- ② 窪地から掻き出された土砂の堆積（排土山）
- ⑤ 掘出された状態の原石
- ⑥ 排土山の裾付近に散在する石垣材として不適当な大きさの屑石群
- ⑦ 採掘坑から少し離れて造成された平場
- ⑧ 自然の転石露頭

※数字は先述の引用した報告書に依拠している。

2. 矢穴の形状等（第18～22図）

露頭に無数の矢穴と矢穴痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるもので、矢口は長さ7～8cm、深さ7～8cm、幅3～4cm、矢穴間隔は3～4cmを測った。森岡・藤川2008の矢穴の型式分類ではAタイプに属するものと判断され、現地で森岡氏が実見された際の見解も同様であった。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼働期間は、江戸時代寛永期と考えられる。里伝にある明治期の太郎山神社鳥居の採掘に伴うと考えられる矢穴及び矢穴痕は現状では確認していないが、近代初頭の染付の鉢と猪口を表採している。

第6節 四十八曲峠六丁の丁場跡

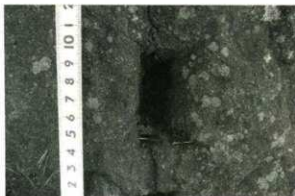
1. 位置と環境（第10図）

太郎山の南斜面の標高740m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭に矢穴列及び穴列痕が残っている。「石切」という地名の場所であったが、これまでに調査の履歴はなかった。登山口から20分程登った場所であり、丁場からさらに10分程度で第5節の丁場に達する。ただし、文献等でこの丁場が記載された史料は未確認である。窪地や排土山、屑石などは確認できない。

なお、この丁場の北側一帯に「詰小場」という地名の平場があり、石材採掘に携わった作業員の寝食の場とも推定される場所がある。第5節の丁場との関連も合わせて、今後の調査の課題としたい。

2. 矢穴の形状等

露頭に矢穴と矢穴痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるもので、矢口は長さ7～8



第11図 四十八曲峠六丁の丁場跡 矢穴



第12図 ぼこの首丁場跡 矢穴

cm、深さ7～8cm、幅3～4cm、矢穴間隔は3～4cmを測った。森岡・藤川 2008 の矢穴の型式分類ではAタイプに属するものと判断された。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼働期間は、江戸時代寛永期と考えられる。

第7節 ぼこの首丁場跡

1. 位置と環境 (第10図)

東太郎山の南斜面の標高720m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭及び掘り出された状態の原石に矢穴列痕が残っている。付近は「ぼこの首」という地名であり、山麓からも緑色凝灰岩の露頭が明瞭に見える一帯である。登山道はなく、急斜面にできた獣道を頼りに踏査を行った。文献等でこの丁場が記載された史料は未確認である。窪地や排土山、屑石などは確認できない。

2. 矢穴の形状等

露頭と掘り出された原石に矢穴痕を確認した。観察の結果、矢穴は長側面が方形となるもので、矢口は長さ10cm、深さ10cmを測った。森岡・藤川 2008 の矢穴の型式分類ではAタイプに属するものと判断されるが、第5節及び第6節で紹介した丁場の矢穴よりやや大きく、細別が可能かと思われる。

3. 遺跡としての評価

矢穴の型式等から考えられる丁場の稼働期間は、江戸時代寛永期頃かと考えられる。

第8節 上塩尻大沢丁場跡

1. 位置と環境 (第13図)

虚空蔵山の南斜面の大沢と呼ぶ谷の東側・標高520m付近にある丁場で、緑色凝灰岩の露頭にドリルの採掘痕が無数に残っている。沢の末端部は上塩尻の集落で、付近には緑色凝灰岩を用いた近代以降の石垣が並び、この丁場の稼働時期を示唆する。近世の矢穴及び矢穴痕は未確認である。文献等でこの丁場が記載された史料は未確認である。沢底には無数の転石、屑石が存在する。

2. 矢穴の形状等

露頭には採掘のために開けられた円錐状のドリル穴やそのドリル穴痕が残っている。直径は2cm程度であろうか。

3. 遺跡としての評価

露頭には近世の矢穴及び矢穴痕が確認されていないが、後世の採掘により失われてしまった可能性がある。現状では丁場の稼働期間は近現代とし、今後、屑石等の詳細な調査を行うことで結論を出したい。



第13図 丁場跡等の分布状況 (その3) S=1/10,000

第5章 調査の成果と課題

発掘調査及び整理作業のなかで明らかになったこと、また、これからの課題を整理して、本書のまとめとしたい。

(1) 史跡上田城跡発掘調査事業〈本丸 尼ヶ淵崖面上の土塁（土塁跡）・平成 29 年調査分〉

調査は、「史跡上田城跡整備基本計画（平成 23 年度改訂版）」に基づいて実施されたもので、調査の目的は本丸及び二の丸東虎口土塁の復元整備事業に係るデータ収集であった。調査箇所は本丸の尼ヶ淵崖面上の土塁（土塁跡）である。尼ヶ淵崖面上の土塁の遺存状況は場所により大きく異なり、南櫓寄りの東側では土塁が確認でき、西側ではこれが見られない。西側は近年まで真田神社の社務所があった場所であり、建物の建設時に土塁が削平されたことが推定できる。今回の発掘調査では土塁が残存している部分の現状確認と、西側の土塁跡の遺構の残存状況を確認し、今後の復元整備に向けて、土塁の規模・構造を把握することが目的であった。

調査の結果、版築土の遺存状況から、土塁は崖面側の状況はほぼ旧状を維持しており、神社の境内に面している北側部分は天端と法面が緩やかに削り取られていることが判明した。この状況は、明治末年頃に撮影された写真の地表面に酷似している。現在は削り取られた部分に盛土をして土塁のように見せているが、いつの普請であるかは明らかではない。

一方、削平された土塁跡では、土塁の基礎と推定される版築が現地表面より 90 cm 程度下から検出されており、土塁が削られた後、大量の土砂で埋め立てられていることが明らかになった。真田神社の境内は、北側では地下 30 cm 程度の付近に上田泥流層があり、こうした状況とは大きく異なっていた。本丸の下段は南側に向かって傾斜する地形だった可能性があらう。

こうした状況から、埋め立てた土砂中から、近世から近代の瓦片が大量に出土した。また、僅かに磁器片が含まれていた。瓦は以前の発掘調査で本丸から出土した瓦と酷似し、近世上田城に関係するものと考えた。詳細な時期は今後の調査研究に委ねたいが、仙石氏の家紋が描かれた軒丸瓦片が一点出土しており、仙石期から松平期にかけて城内で用いられた瓦であると推定した。近代の瓦は、社務所が大正末年頃の建築と伝わっているため、明治時代から大正時代のものと考えている。

なお、これらに混じって、金箔が押された瓦片が一点確認された。小片で全体の形は不明であるが、鬼瓦の一部と考えた。仙石氏以降の上田城で金箔瓦が使用された可能性は認められないことから、これは真田昌幸時代の金箔瓦である可能性が高いと考えた。また、飾瓦と思われる大きな瓦片が出土しており、金箔が押された瓦の胎土と酷似していることから、同一個体であることは確認できなかったが、昌幸時代のものである可能性を指摘しておきたい。今後、胎土分析等により、これが同一個体であるか、または本丸堀から出土している他の真田氏時代の瓦との共通点等について考究する機会を期待したい。今回の出土例は、非常に長い期間の瓦が埋め立て土から混在して出土しており、元位置から離れた場所での出土瓦である。そうした観点から言うと、これまで上田城跡で確認されている金箔瓦が、付近に金箔瓦を載せた建物の存在を推定する根拠となっているのに対し、今回の出土品は直ちにそうした理解をすることは難しいと考える。ただ、仙石期から松平期の瓦が伴出していることから、埋め立てに使われた土砂が、櫓や近代の建物が存在した本丸上の台から調達された可能性もあり、出土した金箔瓦の性格を考える上で、興味深い。昌幸時代の上田城については不明な点が多いが、出土した金箔瓦が研究進展の一助となることを期待したい。

(2) 包蔵地上田城跡の試掘調査〈二の丸 広堀南側の土塁・平成 30 年度調査分〉

調査は埋蔵文化財包蔵地上田城跡内における開発事業に伴うもので、調査箇所は二の丸広堀の南側に設けられた土塁である。史跡外の上田城跡野球場において、老朽化したコンクリートブロック塀を撤去し、新たにネットフェンスを設置する工事の実施に先立ち試掘調査を実施した。

平成 29 年度に今回試掘調査をした土塁の東側においてトイレの新築工事に伴い、事前の発掘調査を実施した。その際には同じようにブロック塀が設けられていた土塁と思われた部分が、近代以降に設置された盛土であることが判明していたため、今回の試掘調査範囲についても、同様に近代以降の盛土であると予想して調査を開始したのだが、数箇所で掘削したトレンチから版築土が確認され、近世の土塁が一部を削平されているものの遺存していることが確認された。

そのため、ブロック塀の撤去の際には遺構の破壊をしないように慎重に施工することとし、新たに設置するネットフェンスの基礎については、ブロック塀の基礎が所在する範囲内での施工とする内容で、上田市教育委員会 スポーツ推進課と保護協議を実施した。

なお、土塁の版築に接して土師質土器の破片が一点出土した。年代決定が難しい小片であるが、一応、近世の遺物として報告した。また、近現代の陶磁器片が出土したが、一点、統制番号が入った磁器片が出土しており、第二次大戦中における上田周辺の磁器の流通を考える上で興味深い出土例である。

(3) 太郎山系石切丁場分布調査及び範囲確認調査〈平成 28～30 年度調査分〉

今回の分布調査では、7 箇所の丁場跡を確認し、遺構の状況を確認した。このうち、上田城跡との関連については断定できないものの、近世の遺跡として重要なものであると判断した 5 箇所の丁場跡（虚空蔵堂丁場跡・牛伏城南西丁場跡・表山道十二丁石の丁場跡・四十八曲峠六丁石の丁場跡・ぼこの首丁場跡）については、上田市の埋蔵文化財分布地図に搭載した。

今回の分布調査の成果として挙げられることは、丁場跡の存在は言うまでも無く、それぞれの丁場跡の具体的な遺構の有無についても把握できたことである。金沢城戸室石切丁場の調査で指摘された石材採掘に伴う窪地や排土山、屑石、平場などの遺構が、太郎山山系でも確認できたことは、金沢城をはじめとした先進事例を参考に、今後、個々の丁場跡の発掘調査を行うための基礎データを得ることが出来たと考えている。特に今回、地形測量を行った表山道十二丁石の丁場跡の一带は、「石切」「詰小場」などの地名が残り、丁場での作業、関連施設、搬出経路といった視点での調査検討ができそうである。

今後の課題は、丁場跡と上田城跡との関連について検証が必要であるということだろう。確認した丁場跡に残る矢穴（痕）と上田城跡の石垣材に残る矢穴痕の比較検討をはじめ、石垣築造あるいは修理に係る文献史料の調査、丁場跡一帯の発掘調査等により、それぞれの丁場の稼働時期を検討する必要がある。仙石期以降の石垣材としての緑色凝灰岩の調達場所は、城に最も近い太郎山山系以外には考えにくい。ただし、それを証明する資史料は未だ十分ではなく、今後、更なる調査研究が必要である。また、山麓には「石切」「石之町」などの地名があり、丁場跡との関連を窺わせる。こうした山麓の「遺構」についても今後調査を進めていく必要がある。

今回の調査を実施するに当たり、文化庁文化財部文化財第二課をはじめ、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、史跡上田城跡整備実施計画検討委員会、真田神社、特に石切丁場における分布調査では森岡秀人氏、白沢勝彦氏には数々の御指導、御教示を賜りましたことに厚く御礼を申し上げます。



第 14 図 上田城跡北櫓台石垣の矢穴列痕



第 15 図 上田城跡尼ヶ淵享保年間石垣の矢穴列

図版 番号	調査 区	出土地点		器 種	残存率	法量(cm)等				備 考
		層 位				最大径	最小径	高 さ	その他	
43-2	UDJ	本丸土塁跡	埋立土	-	-	-	-	-	土師質土器	
48-2	UDJ	本丸土塁跡	埋立土	-	-	< 12.3 >	(5.0)	(3.4)	磁器	
48-3	UDJ	本丸土塁跡	埋立土	皿	-	(2.9)	(1.7)	(2.0)	磁器	
48-4	UDJ	本丸土塁跡	埋立土	徳利	-	-	-	-	磁器	
49-2	UDJ	本丸土塁跡	埋立土	ガラス瓶	-	-	-	-		

図版 番号	調査 区	出土地点		器 種	残存率	法量(cm)等				備 考
		層 位				最大径	最小径	高 さ	その他	
52-1	UDJ	二の丸広堀土塁	版築直上	-	-	-	-	-	土師質土器	1号トレンチ
52-2	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	ガラス瓶	2/3	-	-	5.3	全幅 < 6.5 >	底部に陽刻
52-3	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	碗	2/3	< 7.2 >	3.6	4.6	磁器 染付	統制番号「岐357」
52-4	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	ガラス瓶	完形	-	-	6.0	全幅 4.0	
52-5	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	碗	2/3	< 7.2 >	(2.5)	5.5	磁器 染付	
52-6	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	小型甕	1/2	< 7.1 >	< 3.6 >	5.4	陶器	
52-7	UDJ	二の丸広堀土塁	埋立土	播鉢	-	-	< 14.0 >	(4.1)	陶器	

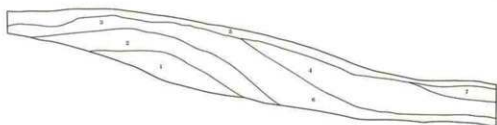
図版 番号	調査 区	出土地点		器 種	残存率	法量(cm)等				備 考
		層 位				最大径	最小径	高 さ	その他	
53-1	TIK	表山道十二丁	表探	長頸壺	1/3	< 22.4 >	< 11.6 >	(20.7)	磁器 近代染付	ゴム印判か
53-2	TIK	表山道十二丁	表探	小鉢	-	< 5.6 >	< 4.8 >	2.3	磁器 染付	

第1表 遺物観察表(土器・陶磁器等)



A

40.2 61m

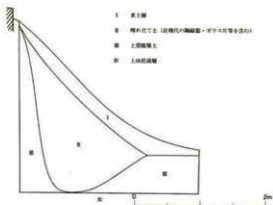


- 1 10Y R 5/2 黄褐色 若干の粘性あり、数10cmの小石が混ざる
- 2 7.5Y R 3/2 黄褐色 「1」よりも粘性あり、こぶし大の小石が混ざる
- 3 10Y R 5/2 黄褐色 粘性は弱く砂状、数に数10cmの小石が混ざる
- 4 10Y R 4/1 黄褐色 1cm以下の小石が混ざる 粘性あり
- 5 7.5Y R 3/2 黄褐色 黄砂土、粘性無く締まりがない
- 6 7.5Y R 6/2 灰褐色 土層厚薄不均、締まりが強い、数10cm〜こぶし大の小石が混ざる
- 7 7.5Y R 4/2 灰褐色 粘性、締まりがある



近郊～近代瓦片出土

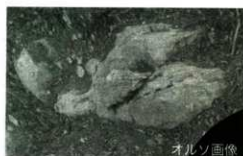
第 16 図 平成 29 年度調査区 本丸土塁跡断面図及び写真



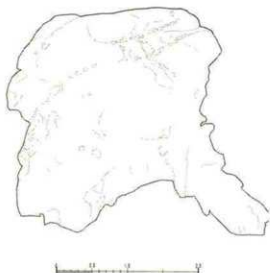
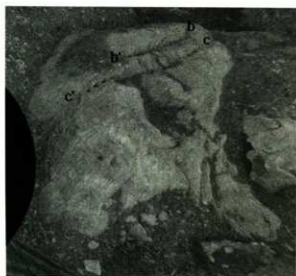
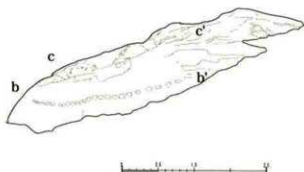
- 1 表土層
- 2 埋め立て土 (近現代の埋藏物・ガラス片等を包含)
- 3 土塁構築土
- 4 土塁底成層



第 17 図 平成 30 年度調査区 二の丸広堀土塁跡断面図及び写真



第 18 図 表山道十二丁の丁場跡 矢穴列 A 実測図



第 19 図 表山道十二丁の丁場跡 矢穴列 B・C 実測図



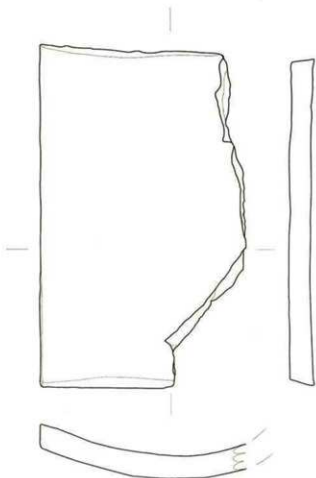
第 20 図 表山道十二丁の丁場跡 矢穴列 D 実測図



第 21 図 表山道十二丁の丁場跡 矢穴列 E 実測図



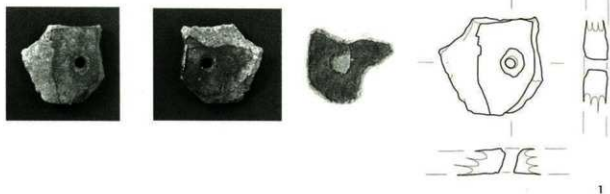
第 22 図 表山道十二丁の丁場跡 矢穴列 F 実測図



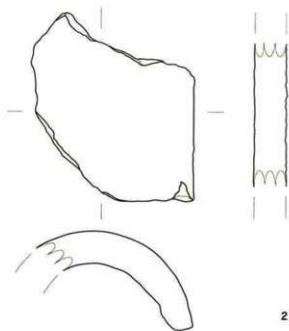
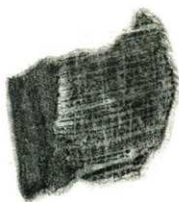
0 10cm

1

第23図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトレンチ)出土品その1 (1/3)



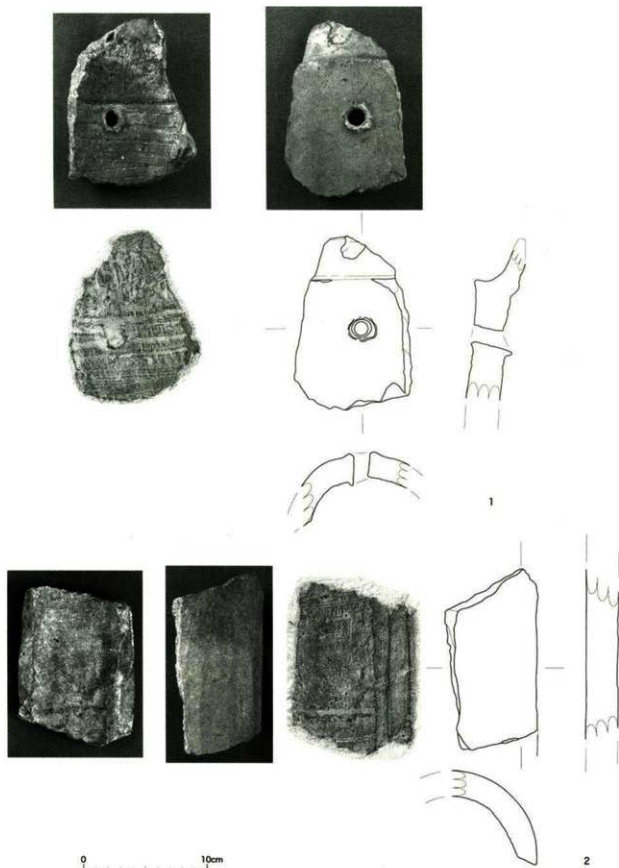
1



2

0 10cm

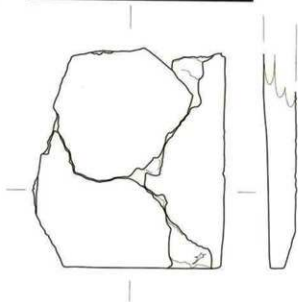
第24図 平成29年本丸土塁跡調査区A(トナ)出土品その2 (1/3)



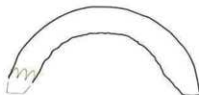
第25図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aノゾ)出土品その3 (1/3)



1

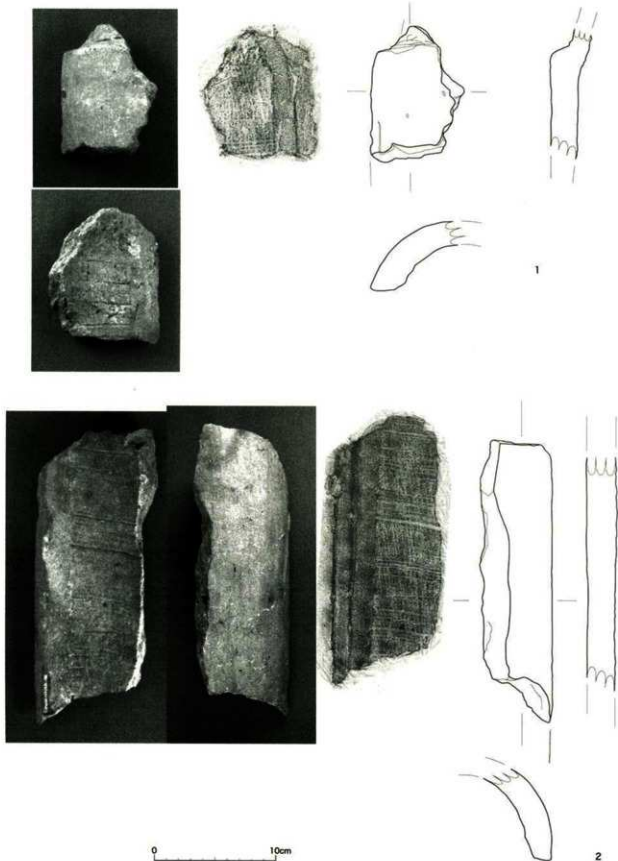


0 10cm

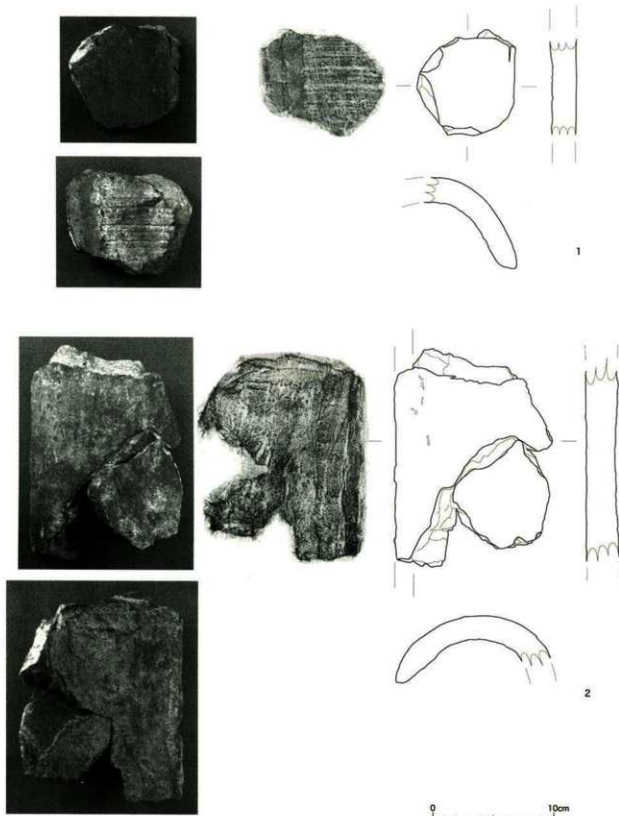


2

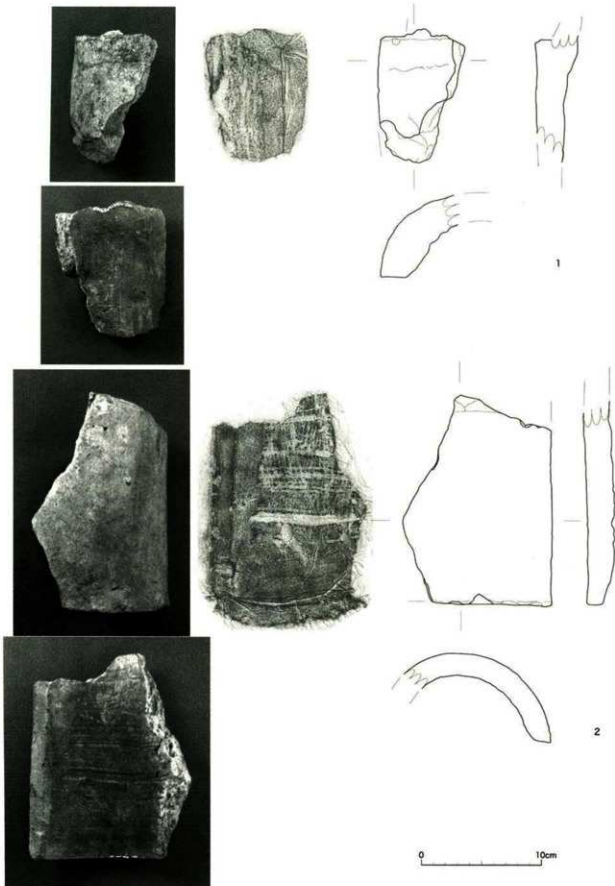
第26図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトレンチ)出土品その4 (1/3)



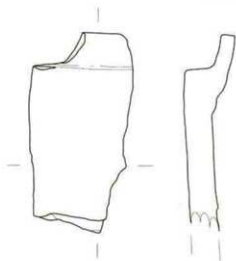
第27図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトルナ)出土品その5 (1/3)



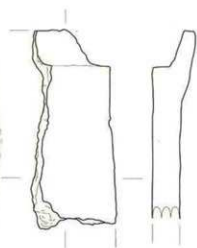
第28図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトレンチ)出土品その6 (1/3)



第29図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトル)出土品その7 (1/3)



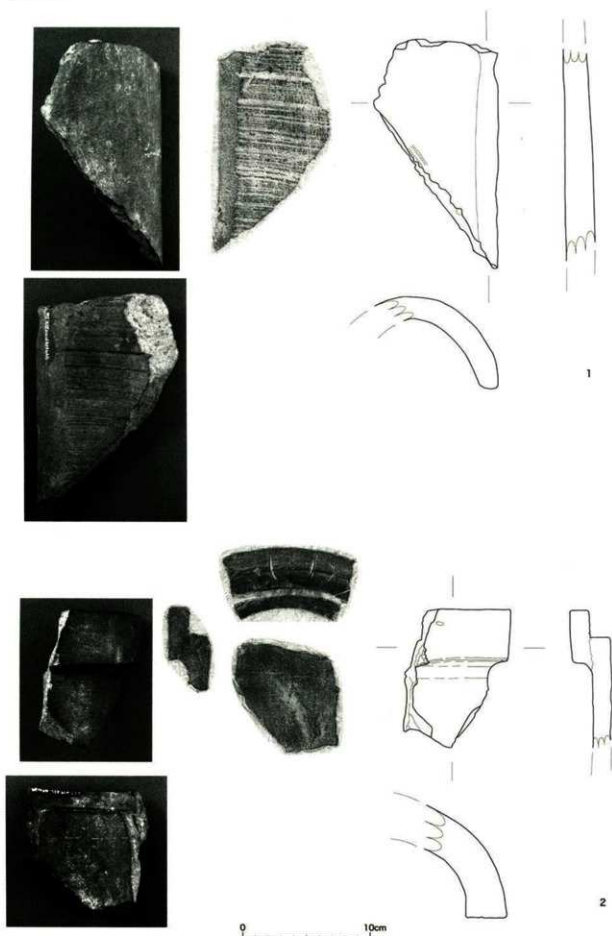
1



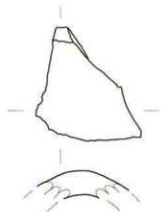
2

0 10cm

第30図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトルチ)出土品その8 (1/3)



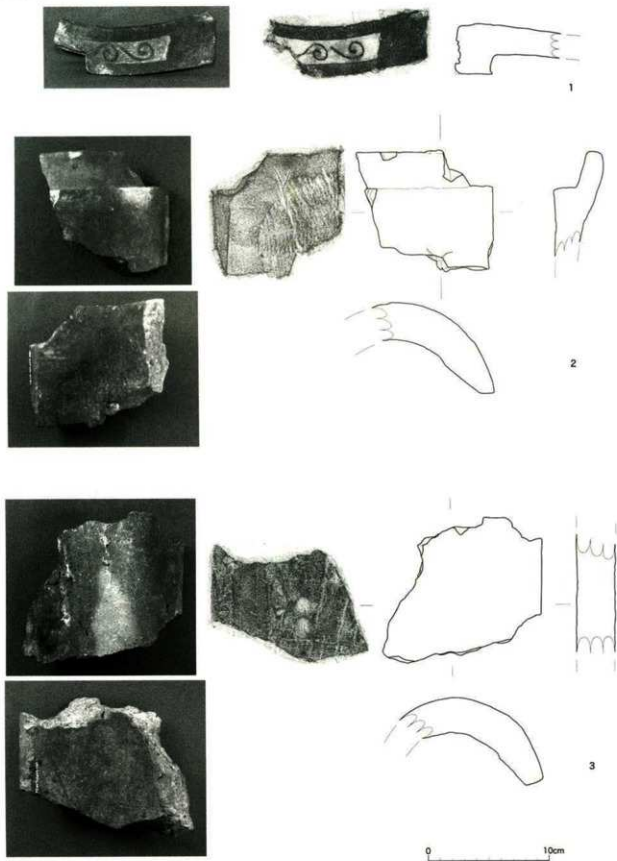
第31図 平成29年本丸土壘跡調査区(Aトレンチ)出土品その9 (1/3)



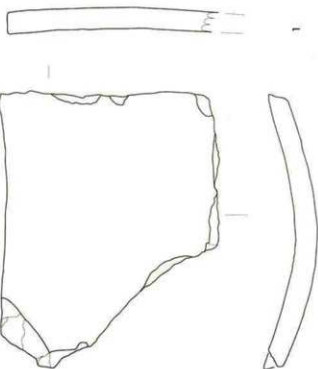
1

0 10cm

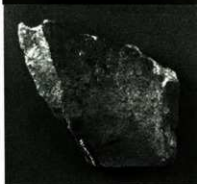
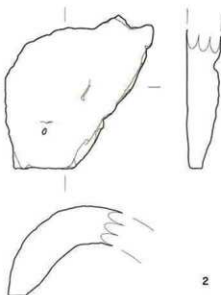
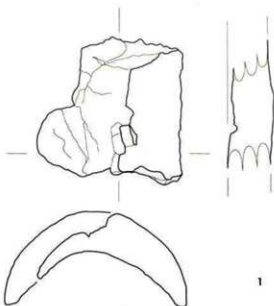
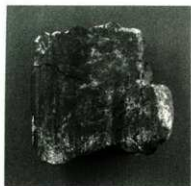
第32図 平成29年本丸土塁跡調査区(Bトレンチ)出土品 (1/3)



第33図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトル)出土品その1 (1/3)

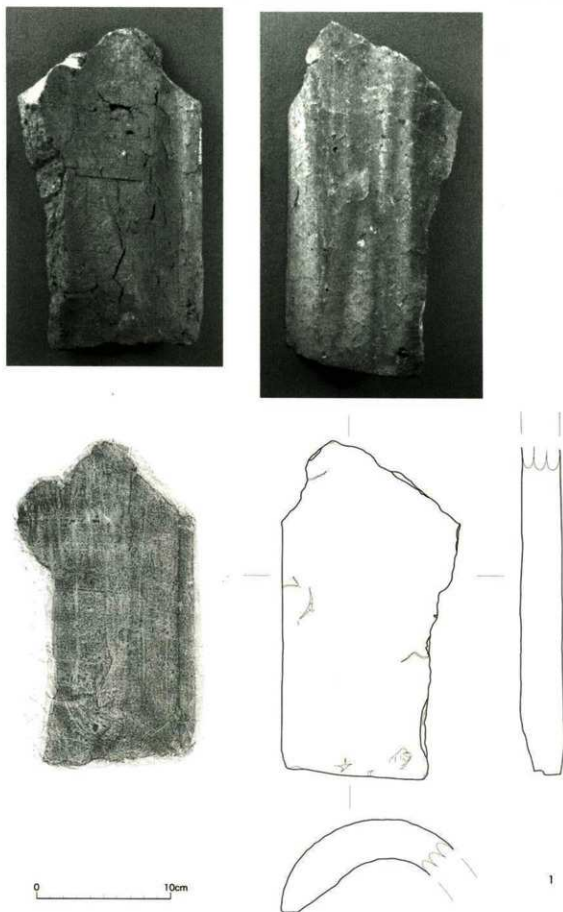


第34図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトル)出土品その2 (1/3)

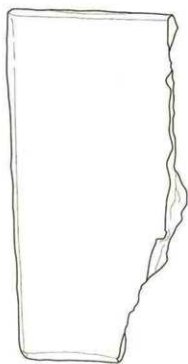


0 10cm

第35図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトゾ)出土品その3 (1/3)



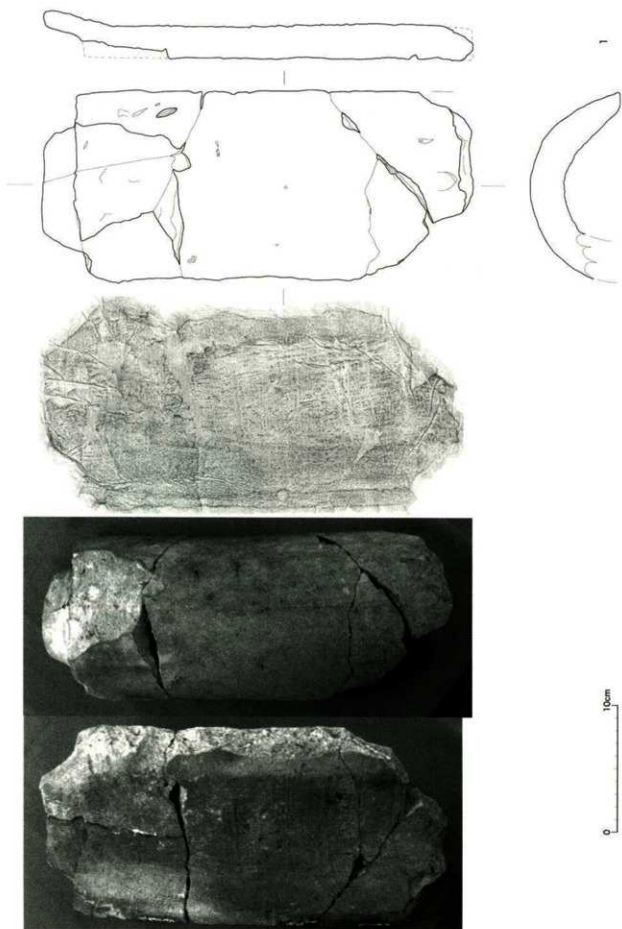
第36図 平成29年本丸土壘跡調査区(Cトシ)出土品その4 (1/3)



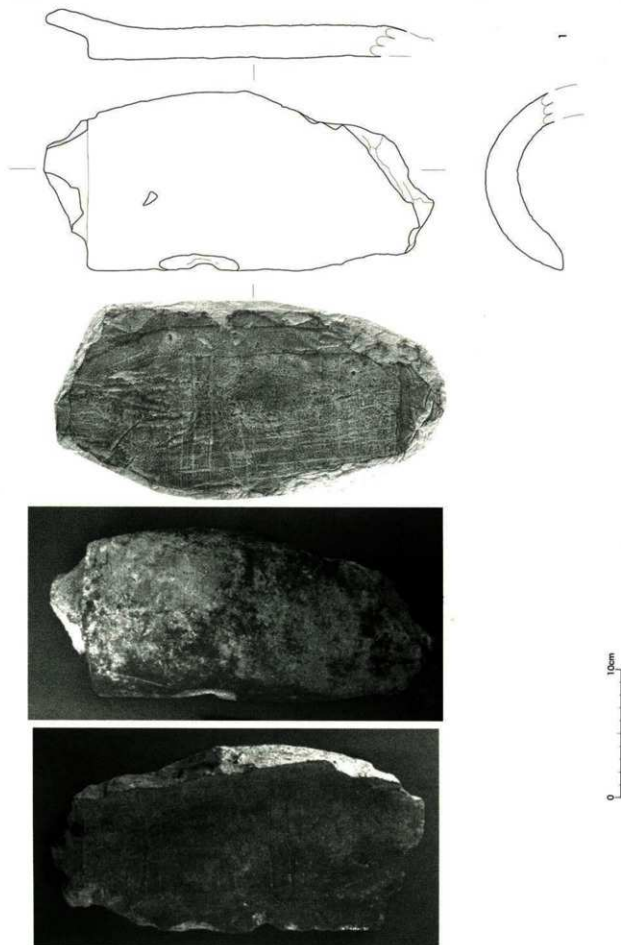
1

0 10cm

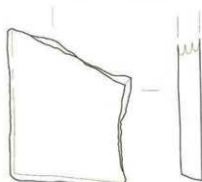
第37図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトレンチ) 出土品その5 (1/3)



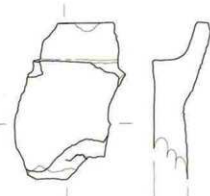
第38図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトノ)出土品その1 (1/3)



第39図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトノヅ)出土品その2 (1/3)



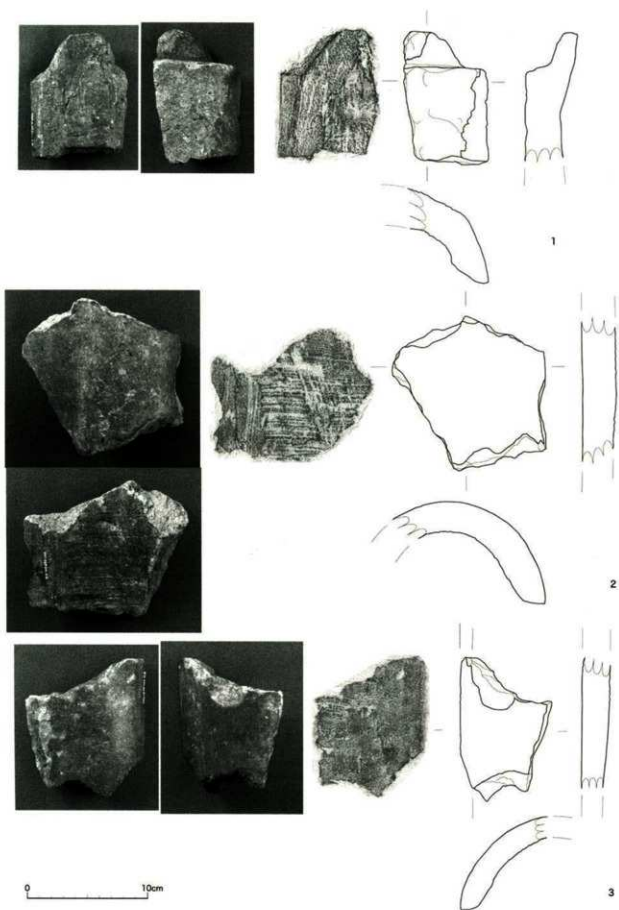
1



2

0 10cm

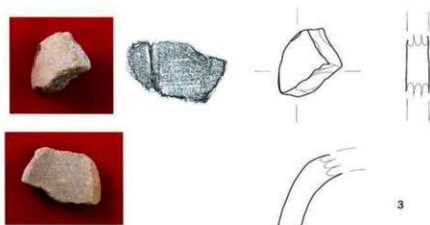
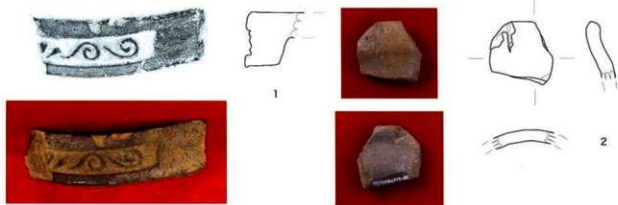
第40図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトシ)出土品その3 (1/3)



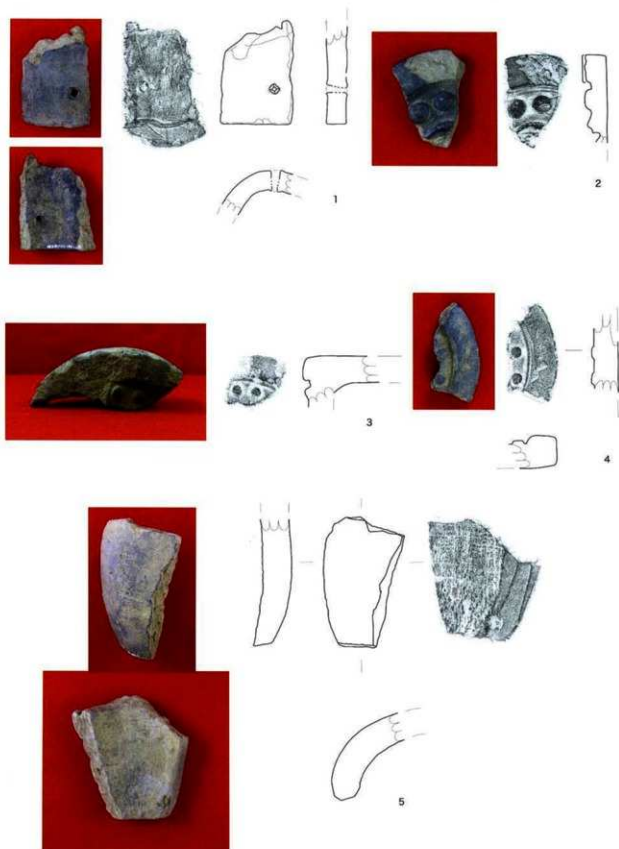
第41図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトシ) 出土品その4 (1/3)



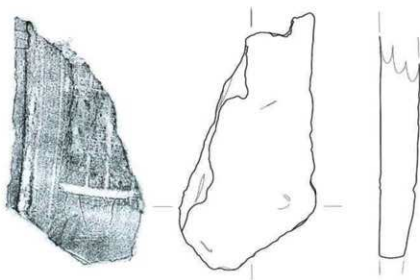
第42図 平成29年本丸土壘跡調査区(Aトシ)出土品その10 (1/3)



第43図 平成29年本丸土壘跡調査区(Aトレンチ)出土品その11 (1/3)

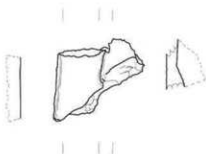


第44図 平成29年本丸土塁跡調査区(Aトシ)出土品その12 (1/3)

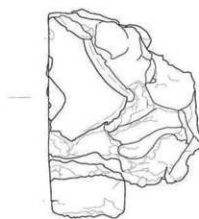
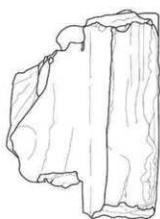


0 10cm

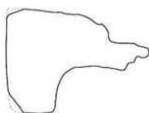
第45図 平成29年本丸土壘跡調査区(Cトン)出土品その6 (1/3)



1

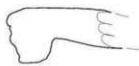


0 10cm



2

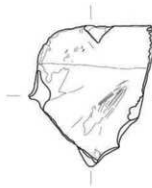
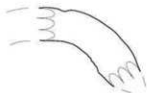
第46図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトル)出土品その7 (1/3)



1



2



0 10cm

第47図 平成29年本丸土塁跡調査区(Cトレンチ)出土品その8 (1/3)



1



2



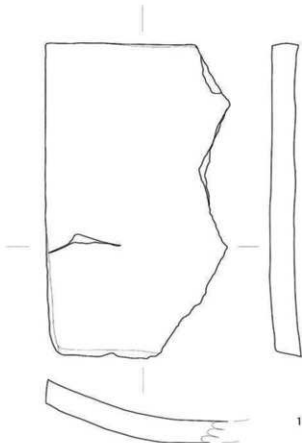
3



4

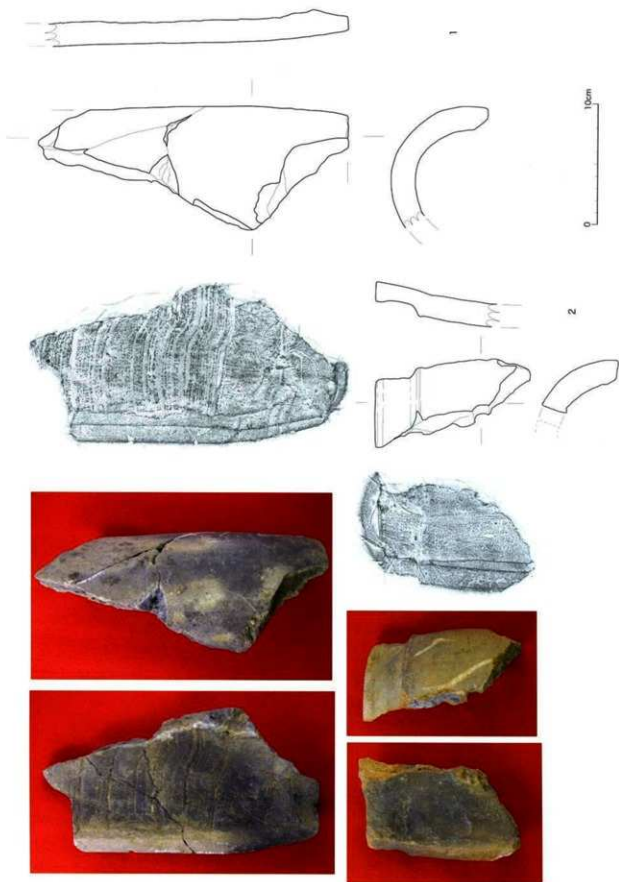
0 10cm

第48図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトレンチ)出土品その5 (1/3)

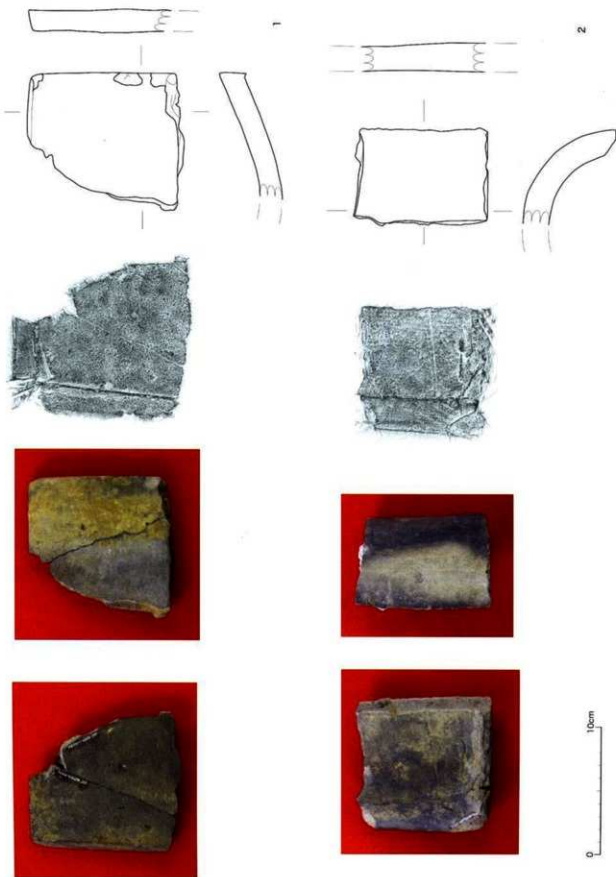


0 10cm

第49図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dトレンチ)出土品その6 (1/3)



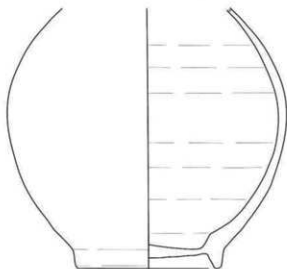
第50図 平成29年本丸土塁跡調査区(Dハッチ)出土品その7 (1/3)



第51図 平成29年本丸土壁跡調査区(Dトシ)出土品その8 (1/3)



第52図 平成30年二の丸広掘調査区出土品その1 (1/3)



1



2

第53図 太郎山系石切丁場調査区出土品 (1/3)



写真1 本丸土塁跡（北から） H29



写真2 本丸土塁跡（南から） H29



写真3 本丸土塁跡埋立土層 H29



写真4 本丸土塁版築土残存状況 H29



写真5 二の丸広堀土塁の残存状況 H30



写真6 二の丸広堀土塁の残存状況 H30



写真7 土塁版築土の破壊状況 H30



写真8 広堀法面の版築土残存状況 H30



写真 9 太郎山系の山々



写真 10 虚空蔵堂丁場跡 全景



写真 11 虚空蔵堂丁場跡 矢穴列・矢穴列痕



写真 12 虚空蔵堂丁場跡 矢穴列・矢穴列痕



写真 13 牛伏城南西丁場跡 窪地背後の露頭



写真 14 牛伏城南西丁場跡 排土山・屑石



写真 15 牛伏城南西丁場跡 排土山・屑石



写真 16 天狗石丁場跡A地点



写真 17 天狗石丁場跡B地点



写真 18 指差しゴーフ口 転石



写真 19 表山道十二丁石の丁場跡 矢穴列



写真 20 表山道十二丁石の丁場跡 矢穴列



写真 21 表山道十二丁石の丁場跡 矢穴列



写真 22 表山道十二丁の丁場跡 窪地（石材採掘跡）



写真 23 表山道十二丁の丁場跡 平場



写真 24 四十八曲峠六丁の丁場跡 矢穴列



写真 25 ぼこの首丁場跡 矢穴列



写真 26 上塩尻大沢丁場跡

$\Delta 1300.7$ 

表山道十二丁の丁場跡

- 57 · 58 -

太郎山



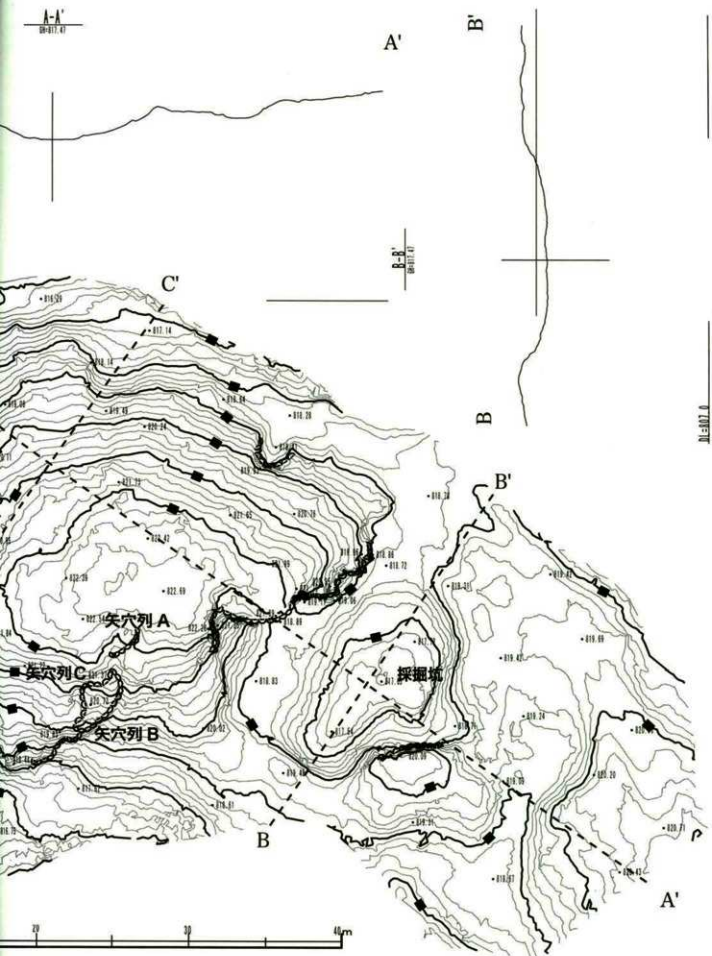
上塩尻大沢丁場跡



虚空蔵堂丁場跡

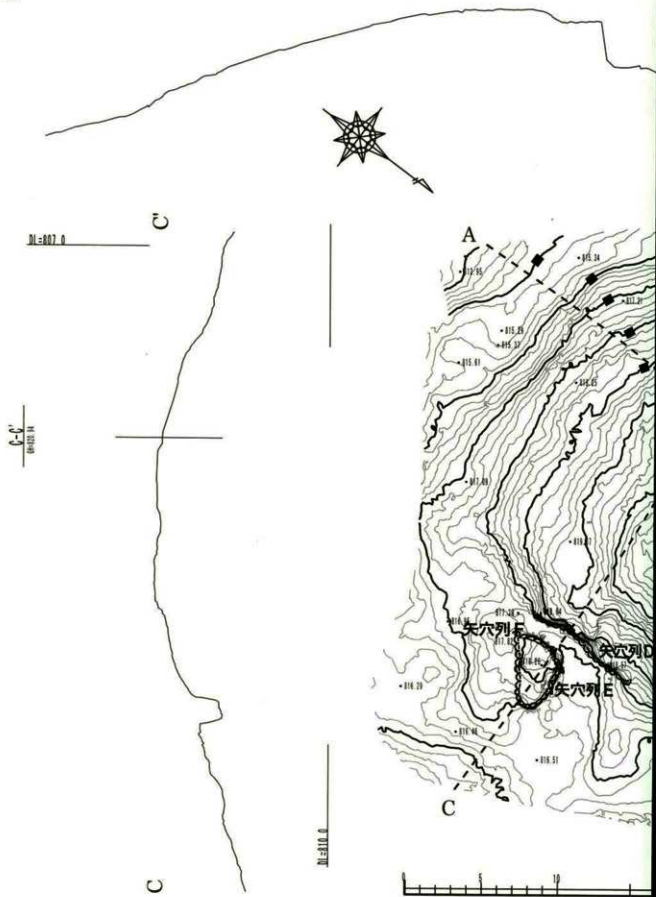


四十八曲



第 55 図 表山道十二丁の丁場跡 平面図及び断面図 (S=1/133)

A



0-6'

01=007.0

C

C

01=010.0

C

矢穴列E

矢穴列D

矢穴列E

報告書抄録

ふりがな 書名	しせきうえだじょうせき 史跡上田城跡		
副書名	平成29～30年度 史跡上田城跡整備事業に伴う発掘調査報告書 平成28～30年度 太郎山系石切丁場分布調査報告書		
シリーズ名	上田市文化財調査報告書	シリーズ番号	第133集
編著者名	和根崎 剛、高橋 和裕		
編集機関	上田市教育委員会（事務局：生涯学習・文化財課 文化財保護担当）		
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神一丁目8番1号 上田駅前ビルバレイ5階 電話0268 (23) 6362		
発行年月日	平成31（西暦2019）年 3月 26日		

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査 期間	発掘調査 面積 (㎡)	調査の原因
		市町村	市道跡番号			
しせき うえだじょうせき 史跡上田城跡 まいぞふんか ぶいけうぞふん 埋蔵文化財包蔵地 うえだじょうせき 上田城跡	上田市二の丸	28212	上田 66	201802～ 201812	約100㎡	史跡上田城跡整備事業 及び 上田城跡野球場改修工事に伴 う発掘調査

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査 期間	発掘調査 面積 (㎡)	調査の原因
		市町村	市道跡番号			
たろうざんけいしんりきりょうほ 太郎山系石切丁場	上田市 太郎山・ 東太郎山・ 虚空嵐山	28212	上田 460	201604～ 201903	-	丁場跡の分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	検出遺物	特記事項
史跡上田城跡 埋蔵文化財包蔵地 上田城跡	城館跡	近世（江戸時代）	土塁跡	瓦（真田氏時代、近世）ほか	金箔瓦が出土 遺構に伴うものは無し
		近現代（明治～昭和時代）	土砂埋立の痕跡	陶磁器、ガラス製品、瓦ほか	

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	検出遺物	特記事項
太郎山系石切丁場	生産遺跡	近世（江戸時代）	矢穴（列）、矢穴（列）痕、窪地（探堀坑）、排土山、平場、屑石は	なし	7箇所の丁場跡及び1箇所の転石採取推定地を確認した。
		近現代（明治～昭和時代）	探堀孔（ドリルほか）	磁器	

要 約	（史跡上田城跡）本丸土塁及び土塁跡の調査を実施した。土塁は厄ヶ瀬崖面に面したもので、東側には天塹を含むその一部が残っているが、西側は基礎の一部のみ残っていることが判明した。遺構に伴わないものの、真田氏時代、仙石氏から松平氏時代の瓦の破片が出土し、金箔瓦が1点検出された。 （埋蔵文化財包蔵地上田城跡）二の丸広堀土塁の調査を実施した。広堀（現在の史跡上田城跡野球場）の南と西側に存在する土塁跡は、後世、天塹にブロック塀が設置されるなどして一部を破壊されたが、版築を残しているなど、遺構の一部が残っていることが確認できた。遺構に伴う遺物は検出していない。 （太郎山系石切丁場）丁場跡の分布調査を実施し、時期はさざまでであるが、7箇所の丁場跡を確認した。矢穴列をはじめ、窪地、平場、排土山、屑石等の遺構が確認されている。矢穴の大きさ等から大まかな時期を推測したが、今後、個々の丁場跡の詳細な発掘調査を実施して、上田城との関係について調査することとした。 なお、本書では近年「近世城跡の近現代」を評価する見解もあることから、近現代の遺構と遺物は、必要と考えられるものについて報告した。
-----	--

〈参考・引用文献〉

- 『史跡上田城跡整備基本計画書』上田市教育委員会 平成3 (1991) 年
- 『史跡上田城跡』国指定史跡上田城跡平成3年度発掘調査概報 上田市教育委員会 平成4 (1992) 年
- 『史跡上田城跡』国指定史跡上田城跡平成4年度発掘調査概報 上田市教育委員会 平成5 (1993) 年
- 『国指定史跡上田城跡 本丸東虎口櫓門復元工事報告書』上田市教育委員会 平成7 (1995) 年
- 『史跡上田城跡 国指定史跡上田城跡本丸内発掘調査報告書』上田市教育委員会 平成9 (1997) 年
- 『国史跡上田城跡石垣解体修復工事報告書—本丸南櫓下ニヶ淵石垣解体修復工事—』
上田市・上田市教育委員会 平成21 (2009) 年
- 『史跡上田城跡石垣基礎調査報告書』上田市・上田市教育委員会 平成22 (2010) 年
- 『史跡上田城跡保存管理計画・史跡上田城跡整備基本計画〈平成23年度改訂版〉』
上田市教育委員会 平成24 (2012) 年
- 『上田城史料調査報告書』・平成21～24年度史跡上田城跡整備事業に係る史料調査報告書・
上田市教育委員会 平成25 (2013) 年
- 『史跡上田城跡 平成24～29年度 史跡上田城跡整備事業に伴う発掘調査報告書』上田市教育委員会
平成30 (2018) 年
- 『郷土の歴史 上田城』上田市立博物館 昭和63 (1988) 年
- 『仙石氏史料集』上田市立博物館 昭和59 (1984) 年
- 『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』石川県金沢城調査事務所 平成25 (2013) 年
- 「矢穴の型式学」森岡秀人・藤川祐作『古代学研究』第180号—森浩一先生傘壽記念論文集—平成19
(2008) 年

上田市文化財報告書 第133集

史跡上田城跡

平成29～30年度
史跡上田城跡整備事業等に伴う発掘調査報告書

平成28～30年度
太郎山系石切丁場分布調査報告書

発行 平成31年3月26日
発行者 上田市
上田市教育委員会
印刷 一喜堂印刷